

「相談支援の例」は、ひきこもり等子ども・若者相談支援センターでの相談の流れがイメージしやすいようにまとめたものです。事例は個人が特定されないよう、要旨を妨げない範囲で加工しています。

※ひきこもり等子ども・若者相談支援センターは、まるっとこどもセンター内に配置しています。

1

相談支援の例 「学校との“作戦会議”でつながる」

本人は、中学校3年生の女子生徒。長く不登校状態にありましたが、保健室に登校し、養護教諭とは話ができるようになってきました。卒業後の進路を決める時期になり、所属がなくなる可能性も想定されたため、家族以外のつながりを作っておけたらと学級担任より、ひきこもり等子ども・若者相談支援センター（以下、センター）に相談の電話がありました。

保護者の了承を得た上で、センターにて学級担任と面談を行い、本人の様子や家族の状況を共有し、卒業後に本人と家族が孤立してしまわないように、まずはセンターとのつながりをつくることを目指しました。

改めて学級担任から保護者にセンターのことを紹介してもらいました。母も今後のことを不安に思っており、学校から本人にセンターについて伝えることにも賛同されました。後日、本人が話しやすい養護教諭からセンターのことを説明し、本人も会ってみてもいいという気持ちになってくれました。

本人が保健室に登校する日に約束をして、センターの相談員が学校へ訪問し、養護教諭の同席のもと、顔合わせとセンターの紹介を行う機会をもちました。

今後は、本人との継続した面談と並行して母との面談も行う中で、本人の自立に向けた応援体制をつくっていく予定です。

このように、一番身近で本人の姿を見ている所属機関との連携からうまれたきっかけを大事にし、本人と家族の気持ちとペースを確認しながら、直接つながる方法を模索しています。



相談支援の例 「さまざまな背景により複雑化している相談にチームで対応」

40 歳代の男性と 30 歳代の女性のきょうだいについて、ひきこもり等子ども・若者相談支援センター（以下、センター）に母が来談されました。

兄は、若い頃に数ヶ月働いた経験がありますが、人間関係がうまくいかず辞めてからは、自宅で過ごしてこられました。妹は、療育手帳を取得していますが、他の福祉サービスは利用せず、自宅で過ごす日が続いていました。両親は 70 歳代で、年金収入にて生活をしています。両親は、経済的な今後の生活を心配するとともに、きょうだいに対して「ちゃんと働いてほしい」という焦りももっておられました。センターだけの対応では難しい状況から、両親の了承をもらった上で、関係機関にも相談しながら取り組むこととしました。

まずは、家族の経済的な困窮状態に対する支援と、兄が再度社会とつながって少しずつでも働く可能性について相談する先として、枚方市自立相談支援センターを案内しました。そして、両親と現状を整理し、両親が子どもの等身大の姿を徐々に受け入れていくための面談を継続的に行う役割を、センターが担うこととしました。また、妹が家族以外の社会とつながるために、まずはセンターの面談に誘い、相談員との関係づくりに努めました。その後、福祉就労も含め、適したサービスを利用できるよう、障害者相談支援センターへの橋渡しをしました。この間、必要に応じて、関係機関で状況を共有し、本人たちや両親が支援を受けやすいよう配慮を行いました。

さまざまな背景が重なり合っている相談に対して、それぞれの関係機関の強みをいかしながら、役割分担をして、お互いに補い合えるような支援ができればと思っています。



本人は、30歳代女性。大学卒業後、一旦就職するも半年で退職し、その後、自宅で過ごしていました。人間関係のトラブルで傷ついた経験を重ねていたため、人との関わりが怖く、外出することができずにいた本人を心配した母が、少しでも社会とつながってほしいと、ひきこもり等子ども・若者相談支援センター（以下、センター）に、来所されました。



母の話では、本人は自分が人からどう思われるかということへの恐怖心や、また同じように傷つけられるのではないかという不安が強いとのことでした。母から本人にセンターのことを紹介してもらい、安心できる場所であることを少しずつ伝えるために、相談員から手紙を書くなどした結果、1年後に本人がセンターに来られるまでになりました。

本人はセンターでの面談を続けながら、次のステップとして居場所支援「ひらぼ」の利用を始めました。ひらぼでは、気を使って言いたいことが言えずに落ち込んだり、逆に相手の態度に腹立たしさを感じたりと、同世代のメンバーとの関わりに大きな刺激を受けていました。

ひらぼの利用から数年、ひきこもりの経験をした当事者だけの会に参加され、とても緊張しながらも、同じ立場の人と話ができてよかったと、また一歩新しい経験をされました。

最近では、もっといろいろな人の話が聞いてみたいとの思いで、他の当事者会への参加も検討されています。

本人は、20歳代男性。高校より不登校で、そのままひきこもり状態となりました。家族とはコミュニケーションはとれていますが、将来の話になると部屋にこもってしまい、イライラした様子をみせます。

ひきこもり等子ども・若者相談支援センター（以下、センター）にて、月に1回、母との面談を始めた当初、母はセンターに対し、“何とかしてほしい”と焦りの気持ちを訴えていました。センターが本人と関わるためには、まずはセンターのことや母が相談に行っていることを本人に伝えてもらえないかと提案するも、母は拒否的で、本人と向き合うことへの苦しさを感じられました。そこには本人の反応への恐怖心や、本人への遠慮や罪悪感があるようでした。

母自身、厳しく育てられたとのことで、本人に対して求めるハードルが高く、世間からの評価をととても気にするところがありました。面談と並行して、母は家族会に参加し始めました。その中で、母の複雑な思いを周りの人から理解してもらったり、母自身の価値観について気づいたりする体験を重ねることで、少しずつ母の抱えていたものが軽くなっていくようでした。

母からの紹介で本人がセンターにつながった頃、母はもっと自分自身の時間を楽しもうと趣味を再開され、それが本人とのよい距離感にもつながっていきました。

若者本人はもちろん、ご家族も、さまざまな葛藤と複雑な感情を抱いておられます。そんな時、地域社会全体がその家族に思いを寄せ、抱えているものを持ち合うことができれば、それは子ども・若者への応援となるのではないかと思います。